

稲田幸久

Yukihisa Inaba

少年騎馬
遊撃隊

第13回

角川春樹
小説賞
受賞作

選考委員、全員激賞!
鮮烈なデビュー作!

小説として一番大切な
心に響くような部分が
書いてある。

北方謙三

すごい新人が現れた。
矢継ぎ早に名シーンがあつて、
もう参りました。

今野敏

北方謙三の小説を
連想させる。
将来性を大きく感じた。

角川春樹

2021年10月15日発売

抜き刷 ダイジェスト版

第十三回 角川春樹小説賞

受賞作「風雲月路」

稲田 幸久

【第十三回角川春樹小説賞選考過程】

第十三回角川春樹小説賞は、二〇二〇年十一月二〇日に締め切られ、計四五四作品の応募がありました。二〇二一年五月二十七日（木）に最終選考会が行われました。北方謙三、今野敏、角川春樹の三名の選考委員により、受賞作が決定しました。



※受賞作は

『駆ける少年騎馬遊撃隊』と改題し、単行本として十月十五日ごろに刊行いたします。

駆ける

少年騎馬遊撃隊

正規の刊行に先立ち、見本として本文（P 18 ～ P 37）より抜き出したものです。
内容には、未校正の部分があることを、予めお断りしておきます。

「顔を上げろ」

それなのに、この親しみやすさはなんだろう。おそるおそる目を上げた小六の腕を掴むと、元春は強引に立ち上がらせた。

「小六、語ってくれ。近松村でなにがあった？」

見つめられると、再び涙が溢れそうになる。元春の目には人を惹きつける不思議な魅力が潜んでいた。

小六はどもりながら語った。思い出したくなかったけど、元春になら打ち明けられる気がした。

三

視界が変わった。赤く染まる大地を遠くまで見渡すことができる。馬に乗るというのは特別なことなのだ、と小六は実感する。いつもより高い位置で空に溶け込むことができる。その開放感がたまらない。

「行こうか」

風花に囁いた。葦毛の牝馬が気持ちよさそうに鼻を鳴らす。風花は走りたくてうずうずしているのだ。

(普段はおとなしすぎるくらいなのに、走る時は気持ちを前面に出す)

面白い奴だな、と小六は微笑む。三年前に生まれた風花は、近松村のどの馬よりも速く走ることができた。

風花は小六が取り上げた馬だ。小六の腕の中で命を脈動させた。以来、小六が彼女の育成を担になっている。

(降り積もった雪が風に飛ばされてちらつくように、風に乗ってどこまでも駆けてほしい)

そう願って名付けられた葦毛の牝馬は、小六にとって特別な存在だ。

「兄様、待って」

背中からの声に舌打ちした。手綱を緩めて振り返ると、案の定、妹の初はつが立っていた。走りたくて前脚を掻く風花をなだめると、小六は馬首を巡らせて妹に向き直った。

「私も行く」

息を切らす初に小六は首を振った。

「駄目だ」

「どうして？ 宴うたげの間は兄様といなさい、と母様から言われております」

「風花に乗っていく。お前は、まだ、遠乗りはできないだろ？」

「兄様の前に乗せてください」

「無理だ」

「この前は走ってくれました。風の中を飛んでいるみたいで気持ちよかったです」

小六は額を押さえた。六つ離れた妹の初は、最近、しきりと兄と一緒にいたがる。両親が馬の世話にかかりつきりなことも影響しているのだろうが、小六は初に別の狙ねらいがあることを知っていた。

(馬に乗りたいたのだ)

一月ほど前に父の耕三こうざうがぼそりとつぶやいたことがある。

「そろそろ初も、馬に乗らないとな」

聞いた初はつの喜びようはすごかった。家中を跳ね回って、誰彼かまわず抱きついたので。

「まだ早くありませぬか？」

心配する母の香かうに向かつて、初は、

「あら、母様」

と反論した。

「兄様だつて、八つの時に乗り始めたと聞いてますわ。実は私、年が明けたら八つになります。馬に乗るにはちよつと良い時期だと思いません？」

「お前は女子おんなだろう？」

初はつの言い方がおもしろかったのか、母の声には笑いが含まれていた。初も笑ったままだ。

「初は八つになるか。ということは小六は十四だな。馬の世話だけではなく、そろそろ別の務めもしなければならぬ」

父に言われて、小六は眉を寄せた。なにを押し付けられるか、だいたいの想像がつく。

「小六。明日から初に乗馬を教えてやれ」

案の定だ。馬にかかりつきりの父母に稽古けいこをつける暇などない。となると、初に教えることができるのは小六だけということになる。

小六が不満顔をしていると、父の耕三が頭に手を置いてきた。大きくて力強い手に、心がふつと緩む。

「小六、よいな？」

真つ黒に日焼けした父を見て、小六はつい頷いてしまった。

「よかったな初。小六が教えてくれるそうだ」

「兄様が？」

初の顔に喜色が浮かぶ。

「村一番の乗り手が教えてくれるのだ。初もすぐにうまくなる」

おだてられて、悪い気はしなかった。実際、小六は村の誰よりも馬を走らせることができた。天賦の才、と皆が感心する腕前だ。

「うまく乗れないからといって泣いたりするなよ」

兄の戒めも、初の耳には届いていない。

「わあい。兄様が教えてくれる」

手を挙げて、家中を駆け回る。

「やれやれ」

小六は溜め息を漏らした。父と母が笑っている。小六が初に乗馬を教えることは、こうして決まったのだ。

教え始めてすぐに気づいたことだったが、初は、馬の扱いに長けていた。身につけたというわ

けではなく、感覺的に分かるらしい。

馬とすぐに打ちとけることができた。気難しい馬も大人しい馬も、初に鼻を撫でられると、トロンと脛を下ろす。あの風花でさえ、すぐに懐いた。気位の高い風花は、小六以外の者に身の回りをうろろうろされることを嫌う。耕三と香でさえ、世話する時には神経を使っていた。

だが初は違った。風花は最初から初に気を許していた。まるで共に育った姉妹のように当たり前に受け入れている。

(へえ)

小六は感心した。小六自身、馬と親しくなることは得意だったが、初は敗けず劣らずといった具合である。兄妹として同じ資質を持って生まれたのかもしれない。馬を扱う術は、小六同様、初にも天賦の才があるらしかった。

初は乗馬も上手だった。練習して一人で乗れるようになる、馬を駆けさせる訓練に入った。躰が小さいため、駆足に関しては少々手こずったようだが、何回か落とされながらも続けていくうち、鞍なしで乗れるまでになった。馬の性格によつて乗り方を変える術も心得ているようで、どの馬も初の騎乗を嫌がらなかった。

日に日に上達することが嬉しかったのだろう。初は、兄を見つけては、

「馬に乗りたい」

とせがむようになる。それが小六を困らせた。

初を教える間は他のことができない。ちやうど、自分で行動する楽しさが分かってきた頃だ。

なにをするわけでもないのに、友達といるだけで満たされた気持ちになることもできた。初が上達するにつれ、それだけ指導の内容も多岐にわたり、時もかけなければならなくなる。そのことが嫌だった。自分だけの時がもっと欲しかった。

「今日は駄目だ。宗吉郎達と夜駆けする」

約束していたのだ。大人達が宴で盛り上がっている間に、禁じられている夜駆けをしようとして。夜駆けは危険だと小さい頃から教えられてきた。月明かりしか頼りがないし、猪や山犬がいつ襲って来るか分からない。だが、そうした危うさこそ若い小六達には魅力的に映った。夜駆けはぜひぶん前から計画されていた。

小六が目を怒らせると、初は頬を膨らませた。

「兄様ばかりずるいわ。私だって遠乗りしたい」

「お前にはまだ早い。村の外はなにがあるか分からぬ」

「兄様が助けてくれます」

「俺だって自分のことで手一杯だ。言っておくがな、初。俺が初めて遠乗りに出たのは十の頃だ。その時、狸が目の前を横切つて馬から落ちた。頭をぶつけそうになったぞ。怪我がなかったのは、運よく茂みに落ちたからで、普通の道では危なかった。ましてや、今日は夜駆けだ」

「兄様の側を離れませぬ。兄様と一緒になら大丈夫でしょう？」

「それは……」

返答に窮した。なにを言っても言い返してくる妹が小憎らしい。だが、その一方で、かわいいと思ってしまう自分もいるのだ。

いっそのこと宗吉郎達に話して連れて行ってやろうか、そんなことを考えた矢先だ。丘を駆け上がって来る蹄の音が耳に届いた。

「なにしてる。置いて行くぞ！」

宗吉郎だ。大きな鹿毛を駆って、横を通り過ぎていく。初には目もくれなかった。

「待ってくれ！」

決まった。初を連れて行きたいなどと言ったら、呆れられるに決まっている。いつか侍になりたい、と豪語する宗吉郎は、男の中の男を気取っていて、集まりに女がいることを嫌う。

「とにかく駄目だ」

風花の頭を反対側に向けた。

「そんな」

泣き声の初に、小六は背中越しに言い捨てた。

「家に帰って大人しく待て！」

鎧で腹を蹴り、風花を駆けさせる。

たちまち風に包まれる。

「兄様、兄様！」

呼びかける妹の音が、闇に飲まれつつある草原の彼方へ消えていった。

「尼子が出雲を奪い返す勢いだ」

口に唾つばえた藁わらを吐き出して、宗吉郎が起き上がった。

風が板壁の隙間から吹き込んでくる。冷たく重い冬の風だ。煽あおられた松明たきまつが舞っていた蛾がを焼く。ジュツと音がし、辺りは静まり返った。

「馬鹿なことを申すな。また、あの頃に戻るといのか」

藤助とうすけが床を叩いて静寂せいじやくが破られる。

「出雲中の兵が続々と集まっている」

宗吉郎が答える。

「まさか宗吉郎の家も尼子につくんじゃなからうな？」

「それはない。叔父上おじうえは毛利側だ。三刀屋様が毛利につくと決めている以上、間違いない」

「尼子はせこいからな」

「尼子がせこいというわけではなからう。ただ、新介しんすけがせこかったというだけだ。そうだと、小六？」

「うん。新介伯父おじは確かにせこい」

全員から注がれる視線を小六は受け止めた。身内に新介などというずる賢い男がいることは恥だったが、四年前から言われ続けているので、もう慣れてる。一時期、新介の親類というだけで冷たく遇せられたが、それと比べれば今の扱いはどうということもない。

「少しは小六の気持ちも考えてやれよ」

人の気持ちを考えることが一番苦手な甚太じんたが言う。小六は額を押さえて、溜め息をついた。気持ちを考えてやれと言われることがなにより嫌なことを、どうしてこいつは分からないのだろう。「お前こそ考えてやれよ」

藤助が甚太の頭を叩き、宗吉郎が腹を抱えて笑った。緊迫した雰囲気が一瞬で緩む。小六もついつい苦笑いを浮かべた。

年長で力持ちの宗吉郎。宗吉郎と同年で頭の切れる藤助。馬の扱いが巧みたくみな小六。それに少し抜けたところがあるために皆にからかわれる甚太の四人は、暇さえあればいつも集まっている。歳の近い者が一緒にいるというだけで、なにもしなくても充たみされていると感ずることができた。「尼子が勝てば、新介がまたでかい顔をするな」

宗吉郎が頭の後ろで手を組んで壁に背を預けた。

「新介伯父はちゃんと俺達が見張っている。尼子が勝てば勝ったで、ちゃんと取引してくれる相手を探せばいい。村のみんなも、分かっているはずだ」

三人が頷いた。新介が威張り散らしていた頃の近松村に戻るわけにはいかない。誰もが思っていることだ。

新介は小六の父の兄で、本家筋にあたる。元々、馬の育成は小六の家が巧みだと評判だったが、口のうまい新介は、さらに馬の売買にも才を発揮した。尼子の一武将と繋つながりを持った新介は、村の馬をまとめて売りさばく販路を確立する。生活の糧かてである馬を定期的に買ってくれる先があ

ることは、村人にとって安心を生んだ。暮らしは良くならなかったが、悪くなることもない。それでよかった。

一方で、売買を任された新介の羽振りはどんどん良くなった。

村人にあれこれ命令し、娘を差し出させたりもする。それでも村の者は「尼子と縁が切れるくらいなら」と飲み込んでいた。近在の領主、三刀屋久扶ひさすけが毛利側についても尼子との関係を切らなかったのは、新介が「尼子に見放されたら、たちまち困窮こんきゆうするぞ」と脅おどして回っていたからである。

月山富田城の戦いで尼子が敗れたのは永祿九年のことだ。戦で勝利した毛利の軍勢のうち、吉川元春率いる吉川軍が凱旋がいてんの途上で近松村に寄った。結果的に見れば、この来訪こそ、村人の目を開かせることになった。

吉川軍の大將は、怯える村人達に「馬を見せてくれ」と頼んだ。ひとしきり見て回った元春は、「いい馬だ」と褒め、さらに「毛利に入れてくれぬか」と丁寧ていねいな態度で要請してきた。

「毛利が馬を買ってくれる？」

元春の申し出に村人達は色めきたった。今までの暮らしを維持できるのであれば、相手は尼子でなくてもよいのだ。

しかも毛利は、今までよりずっと高い値を出すという。

村人はなにが起こっているのか分からず、目を白黒させるばかりだった。呆気あっけに取られている村人に向かって、吉川元春は髭を撫で、

「さすがに安すぎたか」

と苦笑を浮かべた。馬の値はさらに上がった。

元春がつけた値と村人が考えていた値に開きがあったことには、からくりがある。新介が買値の多くを懐に入れていたのだ。尼子との取引額のうちかなりの額を新介と尼子の仕入れ担当がせしめる仕組みができていた。新介の豊かな暮らしも領ける話である。

村人は毛利と取引することを決めた。飛びつかない理由はどこにもなかった。

毛利と取引を開始したことで近松村の暮らしは向上する。代金の交渉は小六の父、耕三を筆頭に六名の代表者が担うことになり、取引額は村人に公表された。

耕三が代表者の一人に選ばれたのは、元春からの強い要望があったためだ。黒風という黒鹿毛の牡馬に目を留めた元春は、育てた耕三に一目置いた。そのため、村の代表に入れるよう直々に計らったのだ。

元春からの強い推しもあり代表に選ばれた耕三だったが、それからずっと村に尽くす日々を送っている。馬の世話をいつもより丹念に行い、値段の交渉も村人達の望みを聞いてから実施した。そんな、自らの暮らしよりも村のためを思う耕三の姿に村人達はかたくなな心を溶かしていった。新介の弟ということで白い目を向けられていた耕三一家は、しだいに村に受け入れられるようになる。

その一方で新介はというと、当然のことながら凋落した。村人からの暴行は耕三の必死の頼みで軽微なもので済んだが、村に居ながら誰からも相手にされない日々を過ごすようになる。畑を

耕したことがない新介は食べ物を得る術を持っておらず、弟の耕三に最低限の食べ物も恵んでもらってなんとか生き長らえている。

「戦は毛利が勝つだろう。いや、勝ってもらわねば困る」

宗吉郎が拳こぶしを握りしめた。

「先程は尼子の勢いがすごいとか言ってたじゃないか」

藤助が反論する。

「尼子に勝ってもらいたいとは一言も言っていない。俺は、断然毛利派だ。吉川元春様は素晴らし
いお方だ」

「直しかに話したことあるのか？」

藤助の問いに、宗吉郎は目を丸くした後、

「ま、それはないんだがな……」

と口ごもった。全員が笑った。

「でも」

宗吉郎は立ち上がった。

「俺は毛利の侍になる男だ。そうなれば吉川様と直つかに話す日も来るだろう。決めた。俺は毛利に
仕つかえるぞ」

「早すぎるよ」

困惑する甚太を宗吉郎が叩いた。

「十六といえは立派な大人だ」

「歳じゃなくて、考えが飛びすぎだってこと」

「別に飛んでなどいいない。前々から考えていた。すると機会が訪れた。絶好の機会がな」
「どういうこと？」

「尼子との戦、俺も行く。叔父上に頼んで連れて行ってもらおう。毛利の侍になるんだ、俺は」
「俺も行くぞ」

口を挟んだのは藤助だ。全員の視線がサツと向かう。

「俺も行く。宗吉郎一人じゃ、心もとないからな。仕方がないから、ついて行ってやる」
「なに言ってるんだ？」

宗吉郎が瞬まばたきを繰り返す。

「俺も侍になりたかった。馬作りも畑仕事も性に合わんのでな」

「だからってお前。決めるのが早すぎないか？」

「前から考えていた。すると機会が訪れた。絶好の機会がな。俺は毛利の侍になる」

「お前ってやつは」

宗吉郎が藤助を小突いた。二人が声を上げて笑う。

小六は二人をぼんやり見つめた。

侍になりたいと宣言してきた宗吉郎とは違って、冷静な藤助も侍になりたいと思っていたなん

て驚きだ。

近松村でも戦に出かけていく者はいらぬ。普段は田畑を耕して暮らしているが、戦が始まると甲冑ちゆうぐやら刀やうやらを持ち出して出かけていく。ある者は戦が終わると帰って来、ある者は、そのまま帰って来なかつた。

だが、宗吉郎や藤助が目指しているのは、そうした男達ではないのだから。宗吉郎は近隣の村々でも一番の怪力の持ち主だ。藤助も誰より賢い頭を持っている。二人なら侍として活躍し、出世していくことも夢物語ではないだろう。宗吉郎も藤助も、侍としての栄達を望んでいるのだ。
(俺には無理だな)

小六は侍になりたいと考えたことがない。馬を育てることがなにより楽しいのだ。
よい馬を育て、買ってもらおう。

育てた馬が戦場を駆けるのであれば、それは自分が駆けているのと同じではなからうか。そんな風に思う。

だが――。

二人がやはり眩まよしく見える。どうしようもないことだった。

「小六はどうする？」

宗吉郎に問われ、小六は首を振った。

「俺は馬と一緒にいる」

宗吉郎と藤助が視線を交わす。

「お前が育てる馬は特別だ。侍になるより、得意なことをして生きた方がいい」

「出雲で一番速い馬を作るよ。宗吉郎と藤助に乗ってもらおう。戦場を駆け回ってくれ」

「まかせとけ。すぐに騎馬武者になつてみせる！」

宗吉郎が肩に腕を廻してきた。太い腕の奥から酸っぱい臭いが漂ってくる。頼りがあると思つた。宗吉郎なら本当に戦で功名を上げられるだろう、そんな気がした。

宗吉郎につられて藤助も肩を組んできた。真中の小六は、年長の二人に持ち上げられながら、
（お別れか）

と感傷に浸つた。もうすぐ毛利が来る。宗吉郎達はそこに合流するつもりだ。

「でもさ」

甚太が一人首を傾げている。

「出雲で一番速い馬は一頭だろ？ 宗吉郎と藤助の二人がどうやって乗るんだよ？ まさか一緒に乗るってわけにもいかないし」

甚太は自らの言葉がよほど面白かったのか、急に腹を抱えて笑い出した。

呆けた三人は、しばらくして同時に溜め息をついた。まず宗吉郎が甚太の尻を蹴り、続いて藤助が腕を取って羽交い絞めにし、最後に小六が甚太の頭を叩いた。

「いってえ！」

大げさに騒ぐ甚太を放すと、三人は何食わぬ顔してあばら家を出た。

「ちよっと待ってよ」

呼びかけてくる声に、三人は吹き出した。甚大が転びそうになりながら追いかけてくる。四人は笑いながら馬の元へ走った。

異変にいち早く気づいたのは風花だった。

駆けている最中、耳を動かし始めたかと思うと、急に頭をもたげて走るのを嫌がり始めた。

「どうした、風花」

手綱を引いて体勢を立て直したが、嫌がるそぶりをやめようとしなない。口を割って駆けている。風花が気難しさを表に出すのは珍しかった。少なくとも小六が乗っている間は従順だった。心を通わせた仲なのである。

「大丈夫か？」

声をかけた途端、今度は前のめりになって駆け始めた。

全力だ。

こうなると風花についてこられる馬はいない。落とされないように風花にしがみつくことだけを考え、小六は一人、村を見渡す丘を上った。

「どうした？」

ようやく風花が止まった。丘の頂上だ。荒い鼻息を繰り返しながら、前脚で地面をしきりに掻いている。

風花をなだめようと首に手を伸ばした小六は、目の端にあり得ないものを捉えて固まってしま

つた。

「え？」

恐る恐る視線を向ける。

途端に寒くなった。冬の夜風のせいではない。躰の奥が一瞬のうちに凍ってしまった。口を開けたままなにもできなくなる。ありえない光景に呆然と佇む。

「急に駆けやがって。追いかける身にもなってくれ」

遅れて上ってきた宗吉郎が馬首を並べる。続いて藤助と甚太。

「な……」

宗吉郎が声を飲む。

「嘘だろ？」

藤助が目を丸くする。

「なんで？」

甚太が声を震わせる。

風が吹き上げてくる。

村の音を運びながら、麓ふもとから吹き上げてくる。

叫び声。馬のいななき。暗闇にはぜる炎。

臭いも一緒だ。むせ返るような煙の臭いと吐き気を催す強烈な異臭。

「どうなってんだ、これは……？」

宗吉郎がつぶやいた。

「どうなってるんだよ！」

続いて叫んだ。

四人は確かに見たのだ。

村を駆け回る具足の男。

野良着の女に振り下ろされる刀。

夜空を焦がす紅蓮の炎の下、地獄絵図のような光景が広がっている。

「燃えてる！ 村が燃えてるよ！」

甚太が喚く。頭を抱えて繰り返し返す。

「なにが起こったんだ！」

藤助がこめかみを掻き巻く。菌を食いしぼりながら、苛立たしげに。

そんな中、小六はただただ村を眺めていた。なにもすることができないのだ。本当になにもすることができない。

村の外に馬が集められている。その馬達が、一斉に喉を鳴らした。

助けを呼んでいる。

必死に、助けを呼んでいる。

反応したのは宗吉郎だ。

躰をビクンと跳ねさせたかと思うと、

「か、母様！」

馬の腹を蹴った。

「母様、母様！」

みるみる背中が小さくなつていく。

「宗吉郎！」

続いたのは藤助だ。藤助は小六と甚太を振り返ると、

「お前達は隣村へ行け。誰か連れて来るんだ。助けてもらうんだ」

宗吉郎の後を追つて丘を駆けた。

宗吉郎が草原を突つ切つていく。馬の尻を叩き、一直線に荒れ狂う焰ほのおに飛び込んでいく。

宗吉郎に騎馬が追つた。

並んだ男は具足をつけている。

宗吉郎は、手を伸ばされたが振りほどき、なおも前へ進もうとする。

馬上でもみ合いが始まった。男が捕らえようとし、宗吉郎が手で払う。

宗吉郎の隣にもう一騎並んだ。

同じく具足をつけた男だ。鈍色にびいろにきらめくものをかざしている。

刀が振り下ろされると同時に、宗吉郎が馬から落ちた。

「あ」

息を飲む間もなく、徒歩かちの男達が宗吉郎を取り囲む。男達は手に棒たすきを携たえている。先端が光つ

ているのは、槍やりだからだ。

すぐに立ち上がった宗吉郎は、男達に飛びかかった。

突き出された槍を躲かむし、柄を掴んだかと思うと、空中へ投げ飛ばした。地面に落ちた男がぐしやりと潰れる。宗吉郎の怪力は男達と比べても敗けていないのだ。

槍を奪った宗吉郎は、もう一人の男に躍わたりかかった。瞬またたく間にやつつけてしまいそうだ。宗吉郎の跳躍は飛鳥のようである。

割って入ったのが騎馬の男だ。

徒歩の男に立ち向かう宗吉郎の背中に刀を振り下ろす。

宗吉郎の手から槍が落ち、動かなくなった。

時が止まったみたいに立ち尽くす。その宗吉郎の胸に、徒歩の男が突っ込んでいく。

「やめろお！」

小六は叫んだ。

小六の運命はいかに…

気になる続きは、10月15日ごろ発売の書籍でお楽しみ下さい！

「駆ける少年騎馬遊撃隊」 本体1,800円＋税

(ISBN 978-4-7584-11393-0)



著者プロフィール

稲田幸久 (いなだ・ゆきひさ)

1983年広島県広島市生まれ。

広島県広島市在住。

大阪教育大学大学院修了。

広島県安芸高田市職員として勤務後、退職。
フリーランスでチラシ作成等を行う傍ら、執筆
を行っている。

株式会社 角川春樹事務所

〒102-0074 東京都千代田区九段南2-1-30 イタリア文化会館ビル5階

営業部 Tel: 03-3263-5881 Fax: 03-3263-6087